

## 第四節 島津軍の琉球侵攻と 奄美五島割譲

奄美にとり文字どおり最大の変革、その後の運命を決定したのが、島津軍の琉球侵攻、その結果として奄美五島の薩摩領編入の歴史的事件である。それだけに、その原因を慎重に広い視野で見極める必要がある。

それには、大陸東方海上の舞台動向を見、次に室町時代後半期の戦国争覇が信長・秀吉・家康の出現活躍によりようやく統一国家体制が成立しつつある国内情勢を併せ考えるべきであると思う。

### 一 南海貿易

元に代わった明国（一三六八—一六六二）は、嚴重な鎖国政策を採り、初代大祖朱元璋即位以来周辺諸国を招撫し、朝鮮・日本・琉球・安南・シャム・マラッカ・パレンバン・スマトラ・ジャワなど五十余国に及び服属国

として臣礼を取らしめ、貿易は宗主国（諸侯の上に立つて覇権を行う国）へ進貢する形式しか許さなかった。一五世紀初め室町幕府三代将軍義満の対明交易Ⅱ勘合貿易がすなわちこれである。

これを活用して巨利を収め南北海上に勇飛したのが、一四世紀末—一六世紀初めの琉球国であった。季節風の荒波あり、ちょうどそのころは衰微傾向にあったとはいえ「和寇」の脅威あり、その間を縫っての渡海は危険高いものだが、それだけに収益もまた多大であった。大陸側の希求する蘇木（染料）、胡椒（香辛料）を遠く南海に求め、硫黄を地元鳥島に掘り出し、進貢して日用品・生糸・絹織物に換える。その還元評価は中華自尊の国らしく物によっては五十倍を超したと言いい、その事業主（三山国王）の財政を潤した。南海産の物資が日本からの進貢物品にも見られ、当時の生糸・絹織物の需要が最も大きなのが日本であることを思えば、明らかに三国中継貿易において琉球が重要地点たりしことが推察できる。

第一尚王朝六代泰久王が首里正殿前に建立した万国津梁の鐘の銘が、如実にその間を語り伝えているので、次に掲げる。

萬国津梁の鐘（一四五八年六月）

琉球国は南海の勝地なり

三韓の秀を鍾め（朝鮮の良き点を集め）

大明を以て輔車となし（輔は車の添木〓互に助け合う）

日域を以て唇齒となす（利害最も深い間柄）

この中間に在りて湧出する蓬萊島なり

舟楫を以て万国の津梁とし（舟とカジ、渡し場と橋）

異産至宝は十方利に充満せり（異国の産物、各地の寺院）

地は靈、人は物へ遠く和夏の仁風を扇ぐ

琉球国の海外活躍はその後も著しく、第二尚王朝により国内統一が完成し自力充実するに応じて、遠くジャワ・マラッカに乗り出し、南方物産を蒐集して、大陸・日本との中継交易量の増大に努めている。

その結果、土木工事としては一四五一年長虹堤が成り那覇港に結んで中心貿易港を造成し、幾多の伽藍を造営して仏教を受け入れて鐘銘に隆盛を誇り、一四六六年鬼界島遠征、一五八〇年八重山のアカハチ反乱鎮定など版図を固め、首里の城府の美化整備に当時の財政充溢の姿を見ることが出来る。

追放令を出していたが、島津忠国これに応じ嘉吉元年（一

四四一）その部将が日向国福島の永徳寺に義昭を誅殺した。

義政これを大いに賞し琉球国を与えたとの説。

②三宅国秀事件〓永正十三年（一五二一）備中蓮島の三宅和

泉守の兵船が琉球攻略のため坊ノ津に入港。これを知った

島津忠隆は將軍足利義植に連絡し彼らを掃す。二十年後

その党類三宅三郎兵衛ら再攻、挫折。島津氏は天文三年（一

五三四）、琉球三司官に「貴国とは一心同体ゆえに安心するよう」伝う。

③亀井茲矩事件〓出雲豪族の出、信長・秀吉に従い播磨・因幡に転戦し功あり。山崎合戦の後、秀吉に所望し、出雲に

代わり「琉球守」を許さる。文禄元年（一五九二）朝鮮出

兵の時「琉球征伐使」の朱印を与えられたが、島津氏の反対で諫止さる。

(二) 応仁の乱（一四六七—一四七七）後、室町幕府の勢威全く衰え、群雄各地に覇を競い世にいう戦国時代に入る。一六世紀初め、南九州の島津氏は、旧豪族の鎮圧いまだ成らず一族内の抗争に明け暮れたが、名君忠良（日新斎）子貴久・孫義久・義弘出するにおよび、城内諸豪を抑え、北進して一五七二年木崎原の戦（えびの市加久藤）に日向の伊東勢を破り、さらに当時島原半島まで占

## 二 島津軍の琉球侵攻

その侵攻理由として、薩摩側と琉球側から正反対のものが従来提示されている。これは一面当然のことかとも思われるが、事件の経過に応じて両側からその背景を考察すべき必要がある。

(一) 薩摩側が第一根拠として挙げるのが嘉吉付庸事件であるが、当時の国内情勢から見て、九州本土ならともかく、南海の琉球に幕府支配力が及んでいる状態とは考えられず、史上記録としての初見も享和二年（一八〇二）完成の「島津国史」であり、真实性を疑う史家が多いのも事実である。

その後一四七一年足利幕府の島津氏に対し印卷（幕府の許可状）不帯の琉球渡航船の取締命令あり、一四八一年には島津氏を介して琉球国の来聘を催促している。さらに下り一五一六年に三宅国秀事件、一五九二年に亀井茲矩事件が伝えられる。

①嘉吉付庸事件〓付庸とは宗主国に属してその命令に従う弱小国。足利六代將軍義教は弟大覚寺義昭に対し謀反の罪で

扱した新興竜造寺氏、日向を南下する大友氏に対峙して両面にこれを撃破し、全九州を庄するに至り、天正十五年（一五八七）秀吉の九州出陣となる。

九州の平定成るや秀吉は続いて東国の伊達氏北条氏を屈服せしめて戦国乱世を收拾するが、転じて大陸に向かい文禄・慶長両度の朝鮮半島大遠征となり、諸侯にその兵員糧食を割り当てたが琉球王尚寧には兵員七千人の糧食十カ月分を賦課している。琉球では驚き、その不可能を訴え、島津氏が仲介し、糧食は代納して事を収めている。

(三) 慶長五年（一六〇〇）関ヶ原の戦いで徳川の天下が決まり、江戸幕府開設のころから島津側の対琉球策が再開される。上記のとおり南九州に勢力を振るう島津氏は、善隣友好の邦としてその防壁となり、他の介入を許さず貿易利潤の独占を目指した。天下統一者たる秀吉は、武力行使せずとも当然その支配下に立つものとして賦課を命じている。琉球としては明の朝貢国であり日本とは相互独立の関係にある。すなわち三者の従来の立場が崩れつつあるのである。

その理由を挙げるなら次の事情であろう。

- ①天下が安定し諸大名領が定着して、島津氏の北進の望みは完全に断たれたこと。
- ②南海の風潮も変化し、日本商船の南進あり、中国人および華僑の進出あり、西欧人の東漸あり、琉球支配が貿易の拡大のためには残された最善の方策たること。
- ③天下統一の余勢は海を越えて大陸にも及ぶ動向を解せず、琉球は易き<sup>やす</sup>につき、漂流民の返還や諸保護措置に対し、当事者たる秀吉・家康・島津氏に十分の謝意・対応を怠り侵入口実を与えたこと。
- 島津氏は、慶長十年琉球出兵の許可を請い、翌年許可される。一方琉球に対して幾度か来聘を促しているが、親中国派の謝名親方（鄭廻）三司官にありこれに応ぜぬ状況にあった。そこでついに慶長十四年三月出發した。百戦練磨の荒武者と、兵器を捨てて平和百年の徒手の士、武器の大差、勝負はすでに明らかである。
- その結果、奄美五島は割譲されて薩摩藩領に編入され、慶長十八年大島奉行が置かれ、元和元年（一六一六）南部三島統治のため徳之島奉行を分設、施政はますます整備されて奄美史の一大転機に入る。